

一大コンビナート
を支えた土木技術

くきぎんざん 久喜銀山遺跡



島根県邑南町

島根県邑南町の国指定史跡「久喜銀山遺跡」の銀鉱脈の発見は、鎌倉時代初期にさかのぼると伝えられていますが、本格的に銀山開発が始まったのは16世紀中頃、毛利元就によるといわれています。

『大志茂家文書』によれば、永禄3年(1560)岩屋温泉蒼で鉱脈が発見されて大いに賑わったと書かれています。岩屋地域には大規模な露頭掘跡や樋追掘跡が集中していることを考えると、銀山開発はここから始められたのでしょう。その後、元亀元年(1570)に小川惣助が大横谷(久喜地内)で大鉱脈を発見したことで更に盛んになり、採掘の中心が久喜大林に移ったものと考えられますが、徳川の日領として賑わったのは17世紀前半までのようです。

明治21年(1888)、鉱業権を得た堀家は近代技術を駆使した大規模な開発を進めました。明治38年(1905)には石見の大森銀山をしのぐ銀や鉛を産出しています。残念ながら明治40年の水害により施設は大被害を受け、また日露戦争後の不況の影響で閉山となりました。

久喜銀山遺跡で近代技術をうかがえるものとして、周辺間歩の水を抜くために掘られた久喜銀山水抜間歩があります。この坑口より450mの場所で大鉱脈が発見されており、明治期の久喜銀山を支えた間歩といえ、掘られた鉱石はここから久喜製錬所に運ばれました。周辺には大型の水車・発電所・砕鉱場・選鉱場なども設置されており、大量の鉱滓を捨てた「カラミ原」などから当時の繁栄をうかがい知ることができます。

また、製錬所の煙を集めて山頂で排出するための煙道が貴重です。レンガ造りの煙道は明治期の構造物であることを示しており、大部分は壊れているものの、残っている箇所は幅1.5m、高さは2m以上あります。当時の製錬所の規模をうかがい知ることができるとともに、製錬所から排出される鉛を含んだ煙を頂上から排出して作業員を鉛の汚染から守った仕組みでもありました。



久喜銀山水抜間歩 周辺間歩の水を抜くための間歩。大横谷間歩の坑道で掘られた鉱石もこの坑道を通り製錬所に運ばれた。

■位置図



温泉蒼周辺の採掘跡群。最初に銀鉱脈が発見されたところ。中央の「赤子淵」との看板から奥に向かって掘削した跡が残る。

ヘビノネゴザ シダの一種で「金山草」とも呼ばれる。重金属を体内に取り込む性質があると言われ、山師は鉱脈探しの手がかりの一つとした。



久喜製錬所跡 水車・発電所・砕鉱場・選鉱場などが設置されていた。地面の下には江戸時代の製錬遺跡が眠っている。



久喜製錬所跡 地下登り煙道跡の内部山頂出口付近北から撮影【邑南町教育委員会蔵】